

(別刷)

生涯学習の先駆者「伊能忠敬」に学ぶ探求心

有川 かおり

生涯学習研究

— 聖徳大学生涯学習研究所紀要 —

第18号 別冊

2020年3月

生涯学習の先駆者「伊能忠敬」に学ぶ探求心

有川 かおり

要旨

〔目的〕 隠居した 50 歳から本格的な学習を開始し、精巧な日本地図完成という、歴史に残る偉業を成し遂げた、伊能忠敬の生き方を、生涯学習の視点から概観し、彼の生き方の現代社会に生きる我々が学ぶべき点について示すこと。〔方法〕 文献調査及び、ゆかりの地である千葉県香取市佐原への実地調査を実施し、人物の沿革について示す。〔考察〕 忠敬は、6 歳で母を亡くし、10 歳で父のもとへ引き取られるまで、小関浜の納屋で起居し、漁具の番をして過ごすなど、幼少期から過酷な環境に身を置いていた。また、その後の人生も多くの困難にぶつかっている。しかしながら、どんな環境に居ても探求心を忘れず、努力をし続けてきた。このことが、晩年の偉業に繋がっている。

〔まとめ〕 現代社会に生きる我々が学ぶべき点として、「学び続ける力・挑戦する力」「年齢・立場を問わず師を見つける力」「チームワーク力」の 3 点が挙げられる。

1. 課題の設定

伊能忠敬といえば、1800 年（寛政 12 年）から 1816 年（文化 13 年）まで、17 年をかけ、日本全国を測量し、国土の正確な姿を明らかにした人物として知られている。このように、日本の歴史に残る人物であるが、初めから測量の道を行っていたわけではない。佐久間（1998）によれば、測量について学び始めたのは、隠居をし、江戸に居を構えた 50 歳過ぎからであった。また、測量そのものを開始したのは 55 歳からであったとされている。その後、彼の測量の旅は 17 年間・第 10 次測量まで続いた。1818 年（文政元年）に 73 歳で亡くなった時点では、全ての地図が完成しておらず、弟子たちが遺志を引き継ぎ、1821 年（文政 4 年）に、『大日本沿海輿地全図』を完成させている。「生涯学習」「リカレント教育」などといった言葉が存在する前から、探求心を持って生涯学び続け、精巧な日本地図の完成という偉業を成し遂げたのである。まさに、「生涯学習の先駆者」と呼べる人物ではないだろうか。

このように、学び続けることによって、偉業を成し遂げた伊能忠敬であるが、彼の人生を生涯学習の視点から論じた研究は少ない。そこで筆者は、伊能忠敬の人生について、生涯学習の視点から概観し、現代社会に生きる我々が学ぶべき点について示したい。

2. 研究方法と手順

第 1 に、伊能忠敬研究の到達点について、先行研究をもとにその実態を明らかにする。

第 2 に、文献調査及び、ゆかりの地である千葉県香取市への実地調査を実施し、人物の沿革について示す。

第 3 に、人物の沿革から、現代社会にも通じる点について読み取り、考察を行う。

以上から得られた知見を基に、現代社会に生きる我々が学ぶべき点について明らかにしていきたい。

3. 先行研究

国立情報学研究所の CiNii によれば、「伊能忠敬」のキーワード検索をすると、450 件の研究が報告されている（2019 年 8 月 31 日現在）。これらの中で多く研究されているテーマは、地理学的な視点の研究、歴史学的な視点の研究である。リカレント教育の先駆者であるのに、生涯学習の視点から論じた研究は少ない。

地理学的な視点の研究としては、増村（1953）のような、「大日本沿海輿地全図」に記載されているある地点について、研究当時の地図と比較する研究や、斉藤ら（1977）のような、忠敬の測量と現在の測量を比較するような研究などが存在している。

歴史学的な視点の研究としては、保柳（1967）のような

伝記類に視点を当てた研究や、忠敬という人物自体に視点を当てた研究、渡辺（1998）などが存在している。

一方で、生涯学習的な視点の研究としては、小西（1994）のような、やや老年学的な「老年期をいかに生きるか」といった研究は存在している。しかし、学びそのものに視点を当て、現代社会に生きる我々が学ぶべき点について示すような研究は少ない。

4. 人物の沿革

伊能忠敬は、1745年（延享2年）、上総の国（千葉県中部）、九十九里浜のほぼ中央の小関村（九十九里町片貝）に住む名主・小関五郎佐衛門家の小関貞恒の第3子として生まれた。まずは、伊能忠敬の生涯を概観するために、保柳（1997）、佐久間（1998）、渡辺・鈴木（2000）、伊能忠敬記念館（2018）を参考に、年譜として、表1にまとめた。

本項では、「九十九里町・小堤での幼少期」「佐原の伊能

表1：伊能忠敬 年譜

時期	年		年齢	出来事
	西暦	和暦		
幼少期	1745	延享2年	0	忠敬上総国山辺郡小関村（現九十九里町）に生まれる。幼名 小関三治郎。
	1751	宝暦元年	6	母小関ミネが死去。父貞恒は離縁して実家神保家（現横芝町）へ戻る。
	1755	宝暦5年	10	父、神保貞恒のもとに引き取られる。
	1762	宝暦12年	17	忠敬と改名する。佐原村伊能家のミチの婚養子となる。通称 三郎右衛門
	1763	宝暦13年	18	長女イネが生まれる。ミチの先夫の子、忠孝死去。
	1766	明和3年	21	長男景敬が生まれる。佐原村凶作のため窮民を救助する。
	1769	明和6年	24	次女シノが生まれる。佐原村牛頭天王祭での紛争を解決する。
	1774	安永3年	29	養母タミ死去。佐原村「河岸1件」をまとめる。
	1778	安永7年	33	妻ミチを伴い奥州松島を旅行する。「奥州紀行」を書く。
	商人・伊能忠敬	1781	天明元年	36
1782		天明2年	37	実父、神保貞恒死去。
1783		天明3年	38	妻ミチ死去。利根川洪水で凶作。利根川堤防修理に活躍。津田氏より苗字帯刀を許される。
1784		天明4年	39	本宿組名主をやめ、村方後見となる。
1786		天明6年	41	次男秀蔵が生まれる（庶出）。母は、法名妙諦。凶作、翌年に掛け多数の窮民を助ける。
1788		天明8年	43	三男順治が生まれる（庶出）。次女シノ死去。
1789		寛政元年	44	三女琴が生まれる（庶出）。
1790		寛政2年	45	妙諦死去（26才）。仙台藩医桑原隆朝の長女ノブを三度目の妻に迎える。地頭津田氏に引退を願うが許されなかった。
1792		寛政4年	47	津田氏より三人扶持を与えられる。
1793		寛政5年	48	久保木清洲らと共に関西旅行する。「旅行記」を書く。
江戸へ 隠居	1794	寛政6年	49	隠居して、家督を長男景敬に譲る。通称を勘解由と改める。三男順治死去。
	1795	寛政7年	50	妻ノブ死去。江戸へ出て、深川黒江町に住む。高橋至時の弟子となる。
測量の旅	1798	寛政10年	53	エイを内縁の妻とする。
	1800	寛政12年	55	★第一次測量 4月から10月にかけて奥州街道、蝦夷地を測量して実測図を作る。12月、大図21葉、小図1葉、上呈。 幕府より苗字帯刀を許される。
	1801	享和元年	56	★第二次測量 4月立、伊豆から陸奥東海岸と奥州街道を測量。12月江戸に戻る。 2月前年測量の地図上呈。子午線1度の長さを二八・二里と算出。
	1802	享和2年	57	★第三次測量 6月立、出羽街道、越後街道など測量。10月江戸に戻る。（幕府の公用事業となり、無賃の人馬を利用可能になる。）
	1803	享和3年	58	★第四次測量 2月立、駿河、尾張、北陸海岸、能登半島、糸魚川、佐渡に渡り、三国峠を経て10月江戸に戻る。糸魚川で事件起こり、勘定奉行に訴えられる。 8月日本東半部沿海実測図作成して幕府に上呈し、将軍家斉の上覧を受ける。 その見事な出来ばえにより幕史に登用され、高橋景保の手附きとなる。以後、幕府の事業として、西日本の測量を命ぜられる。
	1805	文化2年	60	★第五次測量 2月立、東海道、紀州沿岸、大阪、京都、琵琶湖一周、山陽道を岡山へ12月到着、越年。
	1806	文化3年	61	1月岡山を発ち、山陽道と瀬戸内の島々を測量し、赤間関に至り、更に山陰海岸、隠岐島、若狭湾、東海道を東進、11月江戸に戻る。2年越しの第五次測量終わる。忠敬は4月末より病気となり、移動しながら療養をする。孫、三治郎（忠誨）が生まれる。
	1807	文化4年	62	第五次測量地域の地図を作り、12月上呈。
	1808	文化5年	63	★第六次測量 1月江戸に帰着。前年測量地域の地図を作り、7月上呈。
	1809	文化6年	64	★第七次測量 8月立、中山道、山陽道、豊前小倉で越年。
	1810	文化7年	65	豊前、豊後、日向、大隅、薩摩、肥後の海岸、大分で越年。 長女イネの夫、盛右衛門死去。イネは仏門に入り、妙薫と改める。
	1811	文化8年	66	★第八次測量 中国地方の主な街道、美濃、三河、甲州街道を測量し5月江戸に戻る。3年越しの第七次測量終わり、11月九州の大図21葉など上呈。 11月再び九州に向かい、摂津郡山にて越年。
	1812	文化9年	67	九州に渡り、屋久島、種子島、筑前、筑後、肥前などを測量、佐世保にて越年。
	1813	文化10年	68	九州の残りの海岸と街道、宍岐、津島、五島、中国地方の残りの諸街道を測量して姫路で越年。 長男景敬死去（47才）。副隊長、坂部貞兵衛五島列島福江島にて死去（42才）。
	1814	文化11年	69	近畿、中部地方の街道など測量し5月江戸に戻る。4年越しの「第八次測量」終わる。 江戸の屋敷を八丁堀亀島町に移す。
1815	文化12年	70	★第九次測量 2月江戸府内の第1次測量。4月より下役、内弟子を派遣して伊豆七島測量、（忠敬は老齢のため不参加）。熱海にて越年。	
1816	文化13年	71	引続き、富士宮、箱根、川越、熊谷を経て4月帰着。 ★第十次測量 江戸府内の第2次測量。「大日本沿海輿地全図」の作成にとりかかる。「仏国曆象編斥妄」を著す。	
1817	文化14年	72	「大日本沿海輿地全図」の作成を続けるが、体力とみに衰える。	
1818	文政元年	73	4月13日（陽暦5月17日）八丁堀亀島町の屋敷で死去。遺言により浅草源空寺の高橋至時の墓のそばに葬る。景敬の妻にて死去。孫、鏡之助死去。	
忠敬死去 とその後	1821	文政4年	死後3年	7月「大日本沿海輿地全図」完成、幕府に提出。9月はじめて忠敬の喪を公表する。幕府は、忠敬の功により、孫忠誨に五人扶持と町屋敷を与え、永代帯刀を許す。
	1822	文政5年	死後4年	妙薫死去。忠誨佐原へ帰る。佐藤一斎、忠敬の墓碑銘をつくる。
	1823	文政6年	死後5年	源空寺に忠敬の墓碑建立。

注：保柳（1997）佐久間（1998）、渡辺・鈴木（2000）、伊能忠敬記念館（2018）を参考に筆者作成

家・商人としての忠敬」「江戸に転居 一第2の人生への挑戦」「測量の旅と忠敬の死」と、時間の経過に沿って、忠敬の人生を追う。このことで、伊能忠敬の人物像に迫りたい。尚ここでも、保柳（1997）佐久間（1998）、渡辺・鈴木（2000）、伊能忠敬記念館（2018）を参考に人物の沿革をまとめた。また、ゆかりの地である、千葉県香取市佐原への実地調査で得た情報も用いた。

4-1. 九十九里町・小堤での幼少期・少年期

前述の通り、伊能忠敬は1745年（延享2年）、上総の国（千葉県中部）、九十九里浜のほぼ中央の小関村（九十九里町片貝）に住む名主・小関五郎佐衛門家の小関貞恒の第3子として生まれた。幼名を小関三治郎といい、兄と姉がいた。6歳になった時、母みねが亡くなる。小関家は、男女関わず長子相続制であったため、約15キロ北の小堤（山武郡横芝町小堤）の神保家から貞恒を養子として迎えていた。そして、みねが亡くなれば、貞恒は実家に帰る決まりとなっていた。そのため、父は離縁となり、兄と姉を連れて実家に帰ってしまう。三治郎はひとり小関家に残され、10歳で父のもとへ引き取られるまで、小関浜の納屋で起居し、漁具の番をしていたといわれている。

父貞恒の実家である神保家は、かつて近くにあった坂田城の城代家老を勤めていた。そして、小田原城の落城後は、帰農して名主となっていた。実家に戻った父は、兄の厄介になりながら、分家を視野に入れ、2人の子どもと共に働く生活をしていた。三次郎は、10歳で父に引き取られてから、17歳で佐原の伊能家に入婿するまで父のもとで過ごす。通説では、上総・下総・常陸地方の親類や知人の家を頼って、流浪の生活をしたとされている。少年時代の三次郎の様子について、佐久間（1998）で行われた、三次郎の父の生家、神保家の四代目重長の四男が分家して興した、屋号五右衛門の十二代目当主光一氏への聞き取り調査では、以下のように示されている。尚、調査は1988年（昭和63年）に行われ、光一氏は調査当時90歳であった。

三次郎は、中村（現・千葉県香取市香取郡多古町南中）の平山元徳という人について漢学を学んだが、覚えがよくて何か月も経たないときに、先生の教える内容が無くなってしまった。しかし三次郎は、「もっと修業をしたい」と言ったので、先生は茨城のアソンという学者を紹介してくれた。そこでも三次郎が一年位修業したら、「もうお前に教えることはない」と、その学者に言われた。（佐久間1998, pp.3-4）

神保の家に幕府の役人が泊まったとき、三次郎が役人たちの計算をしているのを見ていた。すると役人は、「ぼうず計算のし方を覚えたいか。」と聞いた。三次郎が「はい。」と言うと、役人は三次郎に計算の方法を教えた。すると三次郎がすぐ覚えてしまったので、「お前は、計算する力がすぐれている。」と褒められた。（佐久間1998, p.4）

このように、幼少期・少年期から、好奇心にあふれた、才あふれる人物であったというエピソードが伝えられている。学ぶことの楽しさを、幼少期・少年期から感じていた。その一方で、幼児期に母を亡くした寂しさ、神保家における父の微妙な立場等に関する記録も残っている。

4-2. 佐原の伊能家・商人としての忠敬

三次郎は、1962年（宝暦12年）に17歳で伊能家の婿養子に入った。彼が養子に入った当時の伊能家は、相次いで不幸にみまわれていた。

初めに起きた不幸は、主人の長由の病死である。長由は、妻の「民」と2歳の「達」を残して37歳の若さで病死してしまった。その時、長由の兄で江戸に住んでいた昌雄は、達を伊能家の後継に決め、江戸と佐原を往復して家業を見ていた。しかし、その昌雄も翌年亡くなってしまう。そこで民と達は、民の生家である南中の平山家の世話になり、達が14歳になった時、再び伊能家に帰った。その翌年の1755年（宝暦5年）に、伊能家の親戚にあたる伊能七左衛門の子・景茂を婿養子に迎えた。しかし景茂は、1957年（宝暦7年）に病死してしまう。度重なる不幸をそこで伊能家では、平山家と相談し、平山家の親戚にあたる神保家から三次郎を22歳の達の婿として迎えることにした。忠敬が婿として迎えられた理由として、伊能家・神保家両方の親戚だった平山藤右衛門（民の兄）が、土地改良工場の現場監督として三治郎を使ったところ、素晴らしい采配をふるったことを気に入ったと伝えられている。

この時、新保家と伊能家の家格の問題から、伊能家の親戚・平山藤右衛門（民の兄）を仮親とし、形式的に林大学頭の門人となり、林家から忠敬という名前をもらって、平山忠敬として、伊能家に婿入りしている。幼いころから、世間を見て成長してきた忠敬は、佐原で抜群の商才を発揮した。若き当主は次々と事業拡大に乗り出した。具体的には、本業の酒造業に加え、米を含む穀物の取引、店賃貸等の不動産業、江戸における薪炭問屋の経営、金貸業等である。それらを次々に成功させ、伊能家の資産をますます隆盛にした。

1781年（天明元年）36歳の時からは、村の名主となり、村民の取りまとめや政治を行う役人としても活躍した。1782年（天明2年）から1788年（天明8年）にかけて発生した、天明の大飢饉では、佐原からは1名の餓死者も出さなかったと伝えられている。

伊能家の佐原旧宅（図1）内には、息子景敬に対し1791年（寛政3年）に、忠敬が残した家訓が記されている書碑（図2）がある。カッコで囲われている部分は、現代語訳である。今日に残された家訓から、佐原時代の忠敬の生き方が伝わってくる。

第一 仮にも偽をせず、孝悌忠信にして正直なるべし
（少しも嘘をつかず、正直にきなさい）

第二 身の上の人ハ勿論、身下の人にてても教訓意見あらば急度相用堅く守べし
（どんな人のいうことでも役にたつことや、正しい意見であったら必ず用いて守りなさい）

第三 篤敬謙譲にて言語進退を寛裕ニ諸事謙り敬ミ、少も人と争論など成べからず
（言葉と行動を緩やかにして、万事へりくだって、謹んで、少しの争論もしてはならない）

図1：伊能家 佐原旧宅



注：伊能家佐原旧宅にて撮影
（2019年10月16日 筆者撮影）

図2：伊能家家訓 書碑



注：伊能家佐原旧宅にて撮影
（2019年10月16日 筆者撮影）

このように、事業家、名主と様々な顔を持つ忠敬であったが、暦学を独学で学び続ける学習者としての顔も持っていた。当時最先端の学問であった暦学をもっと勉強したいと思い、暦学に関する書物を江戸から1000冊以上取り寄せ、毎晩読みふけていたという。1793年（寛政5年）48歳の時には、久保木竹窓らと伊勢神宮などを旅行した際に、方位や緯度を記録したという「旅行記」が残されている。忠敬は隠居した49歳以降に、学習を開始したと思われてしまいがちであるがそうではない。実業家、名主と忙しい日々をおくっていた佐原時代も、独学で暦学を学び続けていたのである。

4-3. 江戸に転居 一第2の人生への挑戦—

忠敬が49歳になった1794年（寛政6年）、家を長男に譲り隠居する。そして翌年、1795年（寛政7年）に、江戸に出て深川黒江町に居を構え、大坂城番玉造組の同心から旗本の天文方に抜擢された新進の天文学者・高橋至時に弟子入りした。忠敬50歳、師匠の高橋至時31歳、年齢差19歳であった。

忠敬は当時、天文・暦学を勉強するとともに、自宅に天文方に匹敵する規模の観測所を設け、太陽や恒星の高度などを熱心に観測、推歩という天体運行の計算に熱中した。人生の前半で、商人として大成功した忠敬は、得たお金を用いて、学問を追及しようとしたのである。

大変勉強熱心だった忠敬のエピソードとして、こんな話が残っている。忠孝は、時間を決め観測するため、外出を好まず、雨でも降らないとゆっくり話すこともできなかったという。あまり熱心なので、師匠の高橋至時は忠敬に推歩先生という、あだ名をつけたと伝えられている。

勉強を進める過程で忠敬は、至時が日食や月食の正確な予測のため、地球の大きさを知りたがっていることを知った。浅草の暦局と忠敬の隠宅の間に緯度一分半の差があることは分かっていたから、忠敬はさっそく、深川一暦局間を歩測して緯度一分の距離を歩測で求め、至時に提出した。至時はその時、「深川一暦局間では近かすぎるが、蝦夷地くらいまで測ったら信頼できる値になるだろう」ということを述べた。しかし当時は、そうそう長距離の旅行など許されなかった。そこで忠敬が名目にかかげたのが「地図作り」であった。このことがきっかけとなり、幕府に蝦夷地測量の申請書を提出し、第10次測量まで続く、忠敬の測量の旅が始まった。

4-4. 測量の旅と忠敬の死

至時の言葉がきっかけとなり始まった、忠敬の測量の旅であるが、前述の通り、第10次測量まで続くこととなる。忠敬の測量関連の出来事をまとめたのが、表2「忠敬の測量関連年譜」である。

曲折があったが、第1次の蝦夷地測量が始められる。第1次測量では、根室の近くのニシベツまで往復3,200キロを180日かけて歩測し、途中81ヶ所で天体観測を行った。途方もない作業である。努力の甲斐あって、蝦夷地の実測図は大変高く評価された。現在の地図と比較しても、経度を補正すれば地形は重なるほどの精度である。

第2次測量では測量方法を改善し、間縄を使って本州東海岸の測量を始める。第1次の蝦夷地測量では全行程とも

歩測であったが、測量方法を改善することにより、より精度の高い測量が可能となった。

第3次測量では、出羽から日本海沿岸、第4次測量では東海道・北陸道沿海、と測量が続けられ、1804年（文化元年）には東日本の図が完成した。同年8月に、老中・若年寄の閲覧に供し、9月、第11代将軍・徳川家斉の台覧をうける。

第4次測量までは、幕府が補助金を出した忠敬の個人事業であったが、東日本の図が幕府に評価されたことにより、忠敬に転機がおとずれる。忠敬は、微禄であるが幕臣に登用されたのである。幕臣に登用されてからは、幕府測量隊として下役・内弟子など多数の部下を連れて、老中の御証文を持って西国の海岸と主要街道を丁寧に測量した。伊能隊の全測量日数の約8割は、幕府事業として遂行されたこととなる。

幕臣に登用され、幕府事業として測量を行っていたと書くと、全てが順風満帆な測量の旅であったように感じるが、必ずしもそうではない。忠敬の測量の旅が、困難を要したものであったことを伝える資料として、晩年の忠敬が、娘「妙薫」にあてた手紙が残っている。

もう齒は一つになりけり、時々痛み、奈良漬けも食べ兼ねる。
老年のため、この頃は寒気が身に染みる。
随分用心して、衣服もたくさん着、食事も気を付けている。

江戸に居を構えた50歳過ぎから、師匠について本格的な

表2：忠敬の測量関連年譜

年		年齢	出来事
西暦	和暦		
1800	寛政12年	55	★第一次測量 4月から10月にかけて奥州街道、蝦夷地を測量して実測図を作る。12月、大図21葉、小図1葉、上呈。
1801	享和元年	56	幕府より苗字帯刀を許される。 ★第二次測量 4月出立、伊豆から陸奥東海岸と奥州街道を測量。12月江戸に戻る。 2月前年測量の地図上呈。子午線1度の長さを二八・二里と算出。
1802	享和2年	57	★第三次測量 6月出立、出羽街道、越後街道など測量。10月江戸に戻る。(幕府の公用事業となり、無賃の人馬を利用可能になる。)
1803	享和3年	58	★第四次測量 2月出立、駿河、尾張、北陸海岸、能登半島、糸魚川、佐渡に渡り、三国峠を経て10月江戸に戻る。糸魚川で事件起こり、勘定奉行に訴えられる。
1805	文化2年	60	★第五次測量 2月出発。東海道、紀州沿岸、大阪、京都、琵琶湖一周、山陽道を岡山へ12月到着、越年。
1808	文化5年	63	★第六次測量 1月出立、淡路島、四国の海岸線、伊勢街道を測量、伊勢山田で越年。 1月江戸に帰着。前年測量地域の地図を作り、7月上呈。
1809	文化6年	64	★第七次測量 8月出立、中山道、山陽道、豊前小倉で越年。 中国地方の主な街道、美濃、三河、甲州街道を測量し5月江戸に戻る。3年越しの第七次測量終わり、11月九州の大図21葉など上呈。
1811	文化8年	66	★第八次測量 11月再び九州に向かい、摂津郡山にて越年。
1815	文化12年	70	★第九次測量 2月江戸府内の第1次測量。4月より下役、内弟子を派遣して伊豆七島測量、(忠敬は老齢のため不参加)。熱海にて越年。 引き続き、富士宮、箱根、川越、熊谷を経て4月帰着。
1816	文化13年	71	★第十次測量 江戸府内の第2次測量。「大日本沿海輿地全図」の作成にとりかかる。「仏国暦象編斥妄」を著す。

注：保柳（1997）佐久間（1998）、渡辺・鈴木（2000）、伊能忠敬記念館（2018）を参考に筆者作成

学習を開始し、55歳から測量を開始した忠敬は、第10次測量の段階で71歳になっていた。「人生50年」といわれた江戸時代において、この年齢まで精力的に活動していたことは、大変驚くべきことである。

1817年（文化14年）、伊能忠敬が測量を果たせなかった「蝦夷地北西部」の測量結果を、弟子の間宮林蔵が持って現れた。そして、各地の地図を1枚に繋ぎ合わせる段階になったとき、忠敬は急性肺炎でこの世を去った。1818年（文政元年）のことであった。八丁堀の地図御用所（自宅）で、弟子たちに見守られながら73年の生涯を閉じた。この段階では、地図は未完だったため、忠敬が亡くなったことはふせられ、下役、門人の手で地図作りは継続された。地図が完成し、幕府に提出されたのは、1821年（文政4年）のことであった。忠敬の死から3年、生涯をかけて作成に挑んだ地図作りが終了する。忠敬の地図の正式な名称は「大日本沿海輿地全図」といい、大図214枚、中図8枚、小図3枚からなっている。現在は、国の重要文化財に指定され東京国立博物館等に所蔵されている。

5. 現代社会に生きる我々が学ぶべき点

今まで、伊能忠敬という人物について、時間の経過に沿って、人生を追ってきた。ここからは、忠敬の生き方の現代社会に生きる我々が学ぶべき点について抽出し、考察を行う。筆者は、忠敬の生き方から、生涯学習という観点で、3点の現代社会に生きる我々が学ぶべき点があると考ええる。

1点目は「学び続ける力・挑戦する力」である。忠敬は、困難な幼少時代を経験しながらも、学び続けることを辞めなかった。前述の通り、忠敬は決して隠居後に急に勉強を始めたわけではない。常に人生の中で、学べることを吸収している。当時最先端の学問であった、暦学をもっと勉強したいと思い、暦学に関する書物を江戸から1000冊以上取り寄せ、毎晩読みふけていたというエピソードからも、彼の学び続ける力を読み取ることができる。また、50歳から本格的な学習を開始し、精巧な日本地図完成という、歴史に残る偉業を成し遂げたことから、挑戦する力を持っていたことが分かる。「下準備をしっかりとし、生涯現役で関心分野に挑戦していく」この姿勢が、日本の歴史に残る偉業を成し遂げた原動力の1つではないだろうか。

2点目は「年齢・立場を問わず師を見つける力」である。これは、言わずもがな、大坂城番玉造組の同心から旗本の天文方に抜擢された新進の天文学者・高橋至時に弟子入りしたことから読み取ることができる。前述の通り、弟子入り当時、忠敬50歳、師匠の高橋至時31歳、年齢差19歳で

あった。忠敬は、年齢や立場に関係無く、学ぶべき人を見極め、教を請う姿勢を持っていた。この姿勢は、息子景敬に対し1791年（寛政3年）に、忠敬が残した家訓の2項目「第二 身の上の人ハ勿論、身下の人にてても教訓意見あらば急度相用堅く守べし（どんな人のいうことでも役にたつことや、正しい意見であったら必ず用いて守りなさい）」からも読み取ることができる。人を年齢や立場で差別せず、必要であれば教を請う姿勢は学ぶべきところがある。

3点目は「チームワーク力」である。前述の通り「大日本沿海輿地全図」は、忠敬の死後に完成している。弟子たちは「この地図は伊能忠敬が作ったものだ」と世に伝えるため、彼の死を幕府に伏せて、地図の完成を目指した。高いチームワーク力を発揮した結果、忠敬の死から3年後、日本初の実測地図が完成したのだ。このエピソードから、忠敬が作り上げたチームワーク力がよくわかる。彼は、1782年（天明2年）から1788年（天明8年）にかけて発生した、天明の大飢饉の際、私財を投げ打ち、米や金銭を分け、地域の窮民を救済したほど、慈悲深い人格者だったという。そういった日常的な人との関わりの深さが、周囲のチームワーク力を育む土壌となったのではないだろうか。

ここまで、忠敬の生き方から、3点の現代社会に生きる我々が学ぶべき点について論じてきた。筆者が挙げた3点は、現代社会において生涯学習を行っていく上で、重視すべき点と重なる部分があると考ええる。あらためて言うまでもないが、生涯学習とは「生活の向上、職業上の能力の向上や自己の充実を目指し、各人が自発的な意思に基づいて行うことを基本とし、必要に応じ、可能な限り自己に適した手段及び方法を自ら選びながら生涯を通じて行う学習」である。したがって、1点目の「学び続ける力・挑戦する力」、2点目の「年齢・立場を問わず師を見つける力」を持っていることが、生涯学習を行っていく上で、必要不可欠な要素となってくる。また、「生涯学習を通じた地域課題の解決」が近年、国の方向性として示されていることを鑑みると、3点目の「チームワーク力」も、生涯学習として重視すべき点であるといえよう。

6. まとめ

本稿の目的は、伊能忠敬の人生について、生涯学習の視点から概観し、現代社会に生きる我々が学ぶべき点について示すことであった。本稿では、文献調査及び、ゆかりの地である千葉県香取市への現地調査を実施し、人物の沿革について示した。その上で、現代社会に生きる我々が学ぶべき点についての考察を行った。具体的には、学ぶべき点

として「学び続ける力・挑戦する力」「年齢・立場を問わず師を見つける力」「チームワーク力」の3点が挙げられた。これら3点は、現代社会において生涯学習を行っていく上で、重視すべき点と重なる部分があった。

忠敬は、6歳で母を亡くし、10歳で父のもとへ引き取られるまで、小関浜の納屋で起居し、漁具の番をして過ごすなど、幼少期から過酷な環境に身を置いていた。また、その後の人生も多くの困難にぶつかっている。しかしながら、どんな環境におかれても、努力をし続けてきた。このことが、晩年の偉業に繋がっているのではないだろうか。「忠敬は人生の前半に商才を発揮し、多額のお金を、人生の後半に行った挑戦に充てられたから、日本の歴史に残る偉業を成し遂げたのだ」という指摘もあるかもしれない。確かに、多額のお金を、学問に充てられたことも事実である。しかしながら、彼の行動の根本にあったのは、純粋な「探求心」であった。「知りたい」「深めたい」という、学びの原点を持ち続けていたのである。今から300年近く前に生まれた忠敬であるが、現代社会に生きる我々が学ぶべき点は多くある。先人が「どう生き」「どう学んできたか」を知ることが、現代社会に生きる我々が、自身の学び方を考える上での指標の1つに成り得ると考えられる。

研究課題としては、下記の点が挙げられる。現代社会と忠敬の学びについて、時代背景等を比較し、詳細な分析をするまでには至らなかった点である。今後、詳細な比較を行い、忠敬の学びと、現代の学びの共通点・相違点、現代社会に応用できる点について、さらに探求していきたい。

7. 参考文献

- ・ 渡辺一郎, 鈴木純子 (2000) 『図説 伊能忠敬の地図をよむ 改訂増補版』, 河出書房新社
- ・ 伊能忠敬記念館 (2018) 『国宝 図説伊能忠敬関係資料』
- ・ 増村宏 (1953) 「伊能忠敬測量当時の種子島の情況」, 鹿兒島大学文科報告 (2)
- ・ 保柳睦美 (1967) 「伊能忠敬の伝記類と業績の評価: 明治100年にちなんで」, 地学雑誌 76 (1)
- ・ 斉藤敏夫, 佐藤光, 師橋辰夫 (1977) 「明治初期測量史試論: 伊能忠敬から近代測量の確立まで」, 地図 15 (3)
- ・ 小西輝夫 (1994) 「老年期の創造: 伊能忠敬の場合」, 佛教大学教育学部論集 (5)
- ・ 保柳睦美 (1997) 『伊能忠敬の科学的業績—日本地図作製の近代化への道』, 古今書院
- ・ 佐久間達夫 編著 (1998) 『伊能忠敬 測量日記 別巻 “新説伊能忠敬”』, 東信堂
- ・ 渡辺一郎 (1998) 「伊能忠敬 - 実測の日本地図を作った天文学家 (日本を創った101人) - (限界に挑んだ群像 - 限界を克服した独創力)」, 歴史読本 43 (3)

